BORDER（ドラマ）考察とギャップ

死者との会話

なんでん屋

目次

題名「BORDER」とは、拳銃で撃たれ、死から再生した刑事が死者と交信できる能力を身につけたドラマです。

映像では、死者が主人公のまわりの映像として現れ、会話するストーリーとなっている。
作家の方が原案を作っているが、実際にはどうなのか、そんなことができるのか考察してみた。

１．死後直後の被害者
２．加害者の良心の呵責
３．恐怖心の原因
４．犯人の情報源
５．現実での情報源
６．BORDERの資質

１．死後直後の被害者

拳銃であれ、刃物であれ、被害者はかなり痛い状態で死んでいる。
また出血多量で気を失いながら命が止まることもある。
どちらにしろ、死者は痛みを伴ったまま、または記憶したまま、死者となる。

死者は初七日の間この地上に存在しているようだ。
普通に死んだ死者とこの間接触している人間は、過去に多人数存在する。
こんな事を踏まえても死者は、霊界というところに行っていないものと思われる。

では、死者の存在を感じ取れる人はどんなひとなのだろうか？
凄い親しい人とか、身内に限られるだろうと限定できる。
まったくの見ず知らずの他人に死者が関与するだろうか？
いいえ、そんなことはしない。
昨日会った人間や身内を探すだろう。
身内に自分はどうしたんだと叫ぶだろう。
しかし、死んでいるのでまわりの景色は目に映らない。

となると、死者はまったくの見ず知らずの刑事に自分は誰に殺されたのだと言うことは不可能だ。
もしそういうことができていれば、世の中の事件は全て解決できてしまうことになる。

２．加害者の良心の呵責

加害者はプロならいざ知らず、素人がそのまま平気で日常を過ごせるだろうか？
いいえ、違う。
加害者は必ず、良心の呵責、恐怖心をもったままで過ごさなければならない。
では、何故そんなことになるか考えてみよう。

人に危害を加えたとか、殺害した以外の犯罪なら、おもしろがって良心の呵責はないと考えられる。
人に危害を加えるといつもとは限ら無いが、恐怖心を憶える。
この恐怖心はどこから来るのだろうか？
何年もたてば、忘れてしまってもいいだろう。
しかし、死ぬまで時折思い出すようだ。
それは何故か？

それは、あの世の霊界の人たちが加害者に対して、罵倒や反省を促すようだ。
その声が聞こえないにしろ、加害者は何かしら感じてしまう。
昼の雑踏の中ではうるさすぎて聞こえないだろうが、夜になるとまわりが静かになり思い出してしまうので寝られなくなってしまうことはないだろうか。
そうですね、霊界の死者のささやきが聞こえてしまうものです。
こんな事が毎日続けられると、加害者は良心の呵責に歳悩まれてしまいます。

そこで、勇気ある人は「自首」するだろうし、弱い人は怖がって逃げてしまうことになる。

３．恐怖心の原因

加害者が恐怖心を持ってしまう原因は、被害者の恨みの言葉ではなく、加害者の先祖のおしかりや反省を促す言葉、被害者の先祖の怒りや罵倒の言葉が加害者の恐怖心を増大させていると考えられるし、現実はそうなのだと聞いています。

人はすぐ嫌なことは忘れますが、ときおり思い出すのはそういう仕組みだと思ってください。
個人的な恨みというものは、全世界の人間に必ずありますので、霊界もそうそう罵倒や反省は言ってこないようですが、度を過ぎれば霊界も関与するし、個人で勝手に妄想することもあるでしょう。

しかし、加害者は悪いことをしたと思っていなくて、おもしろがっているようであれば、罪悪感はありませんので、好きなことに熱中しすぎて霊界の罵倒や反省の声や思いは加害者は感じません。
人をいじめたり、だます人は罪悪感を感じませんし、相手のことを心配することもありませんから、恐怖心は出てこないのです。

さらに、好きなことばかりしているから冷静心も罪悪感もないのです。
逆に思い出しても逆ギレするので、被害者を悪だと自己暗示かけてしまいます。
こうなれば、霊界から来る情報は好を成さないでしょう。
恐怖心もありません。

４．犯人の情報源

被害者から犯人の情報を聞けるのは初七日以降だと思われます。
被害者が落ち着き、自分が死んだと自分で判断するのがそのくらいだと思われます。
そう自分で判断すれば、自分の先祖やすでに死んでいる親しき人と会話を行う可能性が高いです。
そこで自分が死んだと悟り、犯人を知っている人なら犯人の名前を告げるでしょう。

こういう場合は、被害者から犯人情報が霊界に伝わります。
この場合、霊界内で口込みとして伝わりますが、すべての霊界の人には伝わらないでしょう。
一部の人たちだけです。

また、後ろから撲殺されたとなれば犯人は不明です。
被害者から霊界に人には情報は伝わりません。
しかし、加害者の先祖は一人は知っているわけです。
でも、未解決事件は多いのです。
加害者の先祖が、自分の後孫をかくまうと霊界には事件は伝播しません。

江戸時代以前の仇討ちはどうでしょうか？
被害者に恨みがあるからこそ、加害者は仇討ちをしますよね。
加害者の先祖が被害者を悪だと思っていると、加害者自身を責めたりはしませんね。
よくぞやったと、褒め称えるでしょう。
当然、孫の加害者を霊界にチクッたりしません。
こうなると、未解決事件にならないでしょうか？

うちの孫は本当はいい奴なんだ。
被害者たちが悪なんだとわかっていれば、孫の犯罪を黙っています。
巻き添えを食った人たちには可哀想だが、まあ仕方が無いと思うでしょう。
こんな感じでも未解決事件になります。

心霊の世界では、因縁、因果応報とも言います。
もうここまで来ると、わけがわかりません。

５．現実での情報源

では、現実では加害者情報をどうして取るか？

・警察の聞き込み
・目撃情報
・近所の噂
・第三者の情報
・被害者近隣の情報
・霊感のある人の直感

まあこんなものでしょうが、捜査や聞き込みでわかる事件は解決しています。
しかし、加害者の絞り込みができない、または絞り込めない事件も存在します。

こんな時、「BORDER」の主人公のような人が必要となってきます。
外国では、犯人捜査に協力する超能力者たちが実際に存在します。
名前を挙げれば何人かいえる人もいるでしょう。

でも、全面解決しない根底に直接犯人とやりとりできないところに問題があります。
超能力者は、特定の人から情報を得たり、霊界の関係者と会話してたり、歳月がたてば被害者から情報を得るでしょう。
こうやって解決すると思っています。

超能力者は、いわるる霊能者も兼ねているわけで、あらゆるところから情報を持ってきています。
そこから特定するわけですけれど、霊界が口を閉ざしたり、被害者が理解できていないと情報があやふやです。

加害者がわからず、被害者も死んだことに気づかなければ、未成仏霊となって現場付近でさまよっています。
霊界の先祖とも話せていないと思われます。
こうなれば、被害者は現実で行方不明のままです。
ときおり、白骨死体となって見つかるのがこんな事件です。
被害者が死んだことに気づけばこういうことにならないのですが・・・

ドラマでは、主人公は霊能者となり事件を解決していくでしょう。
でも、現実は難しいと言えます。

６．**BORDER**の資質

「BORDER」となり得る人は、超能力者や霊能者と言いましたが、ドラマのように解決できる人ばかりではありません。
霊能者にもピンからキリまであります。
易者のように相談者の心を読める人から、未成仏霊の存在を確認できる人、霊界と話せる人、霊界と話せても自分の先祖しか話せない人、他人の先祖と話せる人、霊界に顔が広い人、霊界全体から信頼されている人さまざまです。

インチキ霊媒師や言い当たてられない霊能者は、レベルが低いといえるでしょう。
預言者でも１００％は当たりません。
たまにしかあたらないと思われます。

霊能者で信頼できるのは、情報を出すと1000億人を超える霊界人から情報を教えてくれる人なのです。
その霊能者が、霊界人から信頼されているならば情報を聞き出せるのです。
信頼されているからこそ、教えてくれているのです。
普段からうそを言っていたり、誠実な生活をしていない霊能者は、必要な情報を受け取ることはできません。
現実に、相談者の悩みや問題解決しかできないようなのです。

ドラマでは、主人公は誠実な人間だったからこそ、死者との会話ができるようになったというシナリオです。
まあ、現実もそういう人だけ、死者の言いたいことが理解できると思っています。
聞こえるかどうかは別にして、死者の考えを理解していると思います。
仏壇に向かって語りかけている人たちは、そんな人たちです。

あなたは、周りには誰もいないのに心の中で誰かに話しかけていませんか？
実際に、神の声が聞こえて教えてくれていたと信じていた人が、死んでみると、その声の主は実の兄弟だったという実話があります。
霊能者の中にもこんな人がいるのですから、霊能者の真偽は紙一重なのです。
すべての霊能者や超能力者を１００％信じることは、危険なのです。

７．霊能者の種類

霊能者の種類

霊能者には三種類の人間がいる

１．未成仏霊専任の霊能者
２．成仏霊専任の霊能者
３．菩薩専任の霊能者

１．未成仏霊
ドラマ「BORDER」に出てくる主人公は未成仏霊の専任者である。
普通、人が死ぬとおよそ初七日までは地上に残ったまま状況を判断している。
主人公はその間だけ、未成仏霊と会話ができている設定だ。
過去に死んだ霊とは一度も話をしたことがない。
主人公のお兄さんも過去に自殺しているが、主人公の前には現れなかった。
だから、主人公は未成仏専任の霊能者といえよう。

２．成仏霊
人間が生まれて以来、成仏した霊はただの人から偉人までたくさんいる。
地球人口の何千倍かもしれない。
この成仏霊と話をできる人は、シャーマンであり、日本では「イタコ」と呼ばれている。
大川隆法の市販本に出てくる霊と対話している人たちは、そういう人だと思う。
ただ、成仏霊には良い子、悪い子、普通の子がいるわけで、百パーセント信用はできない。
成仏霊は神ではないので、間違った情報もあるだろう。
ただ、先祖の功績を聞くときは重宝するだろう。
ふつうは、現代の人が成仏霊と会話する場合、そのほとんどは江戸時代の自分の先祖だと思われる。
また、後の世の人が聞けば、明治時代くらいの成仏霊くらいにはなるだろう。

３．菩薩
この菩薩と会話できる霊能者は、日常生活で少しの悪いことはできない。
たまたま善行を重ねていたならば、菩薩の声も聞こえるだろう。
菩薩と会話できれば、間違いの無い真実の内容が聞けるはずである。
千手菩薩や文殊菩薩、不動明王などが菩薩としてあげられる。
ただ、自分の菩薩は生まれたときから決まっているんで、他の菩薩とは話ができない。

様々な菩薩から霊験を聞いている人は、未成仏霊や成仏霊や菩薩以外の生き霊にだまされていると思っていいだろう。